

# “名前負け”の「誤用」について

新野直哉

## 論文要旨

現代日本語における「誤用」の事例として、“名前負け”という語を取り上げる。この語は〈自分の立派な名前に自分の実質が負けること〉という意味で使うのが「正用」であるが、近年、〈相手の名前に威圧され気持ちで負けること〉という「誤用」が指摘されている。この事例について、まず「誤用」例の初出は1932（昭和7）年に、そのような用法の指摘は1966（昭和41）年にまで遡れることを示した。さらに、今日の新聞記事を調査した結果、スポーツ関連の記事では「誤用」が、それ以外の記事では「正用」が優勢という特徴が顕著に見られた。そして、「誤用」は、スポーツの中でも特に、実力差が大きく〈相手の名前に威圧され気持ちで負ける〉という状況が起きやすい、高校野球に代表される学生スポーツの世界での一種の「集団語」という性格が見てとれること、その一方で2011年ごろ以降は「誤用」例が減少しており、これは各紙の規範意識の変化によると考えられることを述べた。

**キーワード**【“名前負け”、「誤用」、新聞、集団語、言語規範意識】

## 1 はじめに

筆者は、これまで、近過去～今日における新語・新用法の発生・浸透・定着について研究してきた（新野2011、2013、2016など）。このような事例には、「日本語本」（日本語に関する一般向けの本）やテレビのクイズ番組等で「間違い言葉」「おかしい日本語」などとして取り上げられ、一般社会に広く知られているものも多い。そのような事例について科学的態度で調査・分析・考察を行いその結果を公にすることは、研究者の社会貢献の一つの形であると考えている。

今回扱う“名前負け”も、そのような事例としてよく取り上げられている部類に属するが、この語について実例の調査等に基づく本格的な分析・考察を言語研究者の立場から行った文献は未だ見られない。

まず、この語の「正用」と「誤用」を確認しておく<sup>1)</sup>。〔1〕は新聞掲載のコラムである。

〔1〕先日、西陵商の劇的な逆転優勝で幕を閉じた全国高校ラグビー大会。4度の優勝経歴を誇る強豪に対しての印象を聞かれた、あるチームの主将。

「名前負けしたら、そこで終わり。相手の名前を意識せず、初心に帰って戦うだけです」

その意気込みは伝わりますが、残念ながら「誤用」。「名前負け」は「名前ばかりが立派で、実質が伴わないこと」をいい、「相手の名前を聞いただけで、圧倒される」の意味には使いません。

インタビューでの選手の肉声をそのまま載せたのでしょうか、「誤用」のまま掲載してよかったのかどうか。話し言葉も、活字になった場合、どうチェックするのか……悩みは尽きません。【宇治敏行】（「読めば読むほど」校閲インサイド 肉声に混じる「誤用」『毎日』1997.1.30 東京朝刊）

また、『三省堂国語辞典』第7版（2014）では、「名前負け」の項で、以下のように記す。

〔2〕①名前だけりっぱで、じっさいがかえって見おとりすること。②〔あやまって〕その名前を聞いただけでおそれをなすこと。「有名校に一する」

①の意味が「正用」、②の意味が「誤用」ということになる。

この語について筆者は、以前、『日本経済新聞』ウェブ版連載記事「ことばオンライン」2010年3月19日付掲載の「「名前負け」高校野球記事に多い誤用」にコメントを掲載した。この記事を下に挙げる（後にこの連載は日本経済新聞社編（2013）として書籍化され、この記事は一部改稿のうえ pp.118-119 に掲載された）。

〔3〕「名前負け」という語の誤用が広がっています。本来は「名前が立派過ぎて実物が見劣りする」という意味ですが、「相手の名前に圧倒される」場面での誤った使用例が新聞のスポーツ記事によく出てきます。

近現代の言語変化を研究する国立国語研究所の新野直哉さんによると、誤用は特に高校野球関連の記事で多く見られ、「伝統校に名前負けすることなく戦う」のような監督や選手の談話に集中しているといえます。地方予選ではチーム間の実力差が大きい対戦もあり、強豪校の名前から受けるプレッシャーをつい「名前負け」と言ってしまうようです。当事者にとって簡潔でしっくりくる言葉なのかもしれません。

偉大な先人の名跡を襲名する歌舞伎や落語など伝統文化の世界は別として、私たちが日常生活で本来の意味の「名前負け」をするような場面はそうありません。誤用の広がる理由について、新野さんは「自分の名前に負けるよりも、相手の名前に負ける状況のほうがはるかに多いことが大きい」と分析しています。甲子園球場で選抜高校野球大会が始まります。戦う相手は同じ高校生。選手には伝統校や強豪校の名前に萎縮することなく、日ごろの練習成果を発揮してほしいですね。（小林肇）

今回、当時の考察内容に新聞記事での使用実態についての最新の調査結果を加味し、改めて分析・考察を試みた。以下、引用中の下線、{ } 内は筆者による。漢字の字体は現行のものに直し、振り仮名は省いた。語は“ ” に入れ、意味は〈 〉に入れて表す。またいわ

ゆる「三大紙」の紙名は、『朝日』のように「新聞」を略して示す。

## 2 先行文献

管見の限り、この語の〈相手の名前に負けること〉という意味の例の存在を指摘した最初の文献は、白石（1966：80-83）である<sup>2)</sup>。ここで白石は、テレビの相撲中継で“兄弟子負け”という語が「兄弟子が負けるのではなくて、兄弟子二負ける」の意で使われていたことを述べる。そして、同じ類の言い方として、“衣裳負け”・“勢い負け”・“位負け”・“名前負け”の4語を挙げ、次のように解説する。

[4] どれも、二負けるの意味であるが、負ける相手は、だれかとなると、ことばによって、自分のものだけだったり、相手のものだけだったり、自分のにも相手のにも両方にいたりする。

「衣裳負け」は、自分の実力が自分の衣裳に劣っていることの意味だけか。「名まえ負け」は、自分の名まえがりっぱすぎて、かえって人物・実質が見劣りすることの意味か。また、相手の名まえに負けることもあるか。「名まえ」には、姓名のときも、肩書きのときもある。「<sup>(ママ)</sup>勢負け」は、相手の勢いに負けることの意味のようである。「位負け」は、

(一) 自分の地位が実力以上であるため、かえって、その地位に負け自分の不利益になること。

(二) 相手の地位実力に負けて、圧倒されること。

の二義がある。

次の新聞記事は、相手の名まえに負けるの意味で、「名まえ負け」と「位負け」を同じに使ったものである。(81-82)

そして白石は、1965年の第47回全国高等学校野球選手権大会（いわゆる「夏の甲子園」）1回戦の武生（北陸代表。4年ぶり4回目の出場）対徳島商（南四国代表。2年ぶり9回目の出場）の出場で初出場は戦前の第23回（1937年）に遡る）の試合（徳島商が9対0で勝利）に関する[5]の新聞記事を挙げる（「孫引き」は好ましくないので、記事原物（縮刷版）から引用した）。

### [5] “名前負け”を反省

四国の古豪徳島商に力いっぱいぶつかった武生浜本監督は「完敗です」とあっさり敗戦を認めた。相手が優勝候補だけに敗れたあとの表情もいたってさっぱりしたもの。「初回を終って徳商はたいしたことはないとみた。だが選手はあまりにも相手を意識しすぎ、名前負けしてしまった。利光{=徳島商の投手}に対してもそうだ。カーブをねらえといってもつい直球に手を出してしまった」と、しきりに“位負け”を反省。

(『朝日』1965.8.17 朝刊「ネット裏」)

ただ、ここで白石は、「自分の名まえがりっばすぎて、かえって人物・実質が見劣りする  
ことの意味か。また、相手の名まえに負けることもあるか」と両方の意味を併記していずれ  
も認めるような姿勢で、後者を「誤用」扱いはしていない。

明確に「誤用」扱いしたのは同じく管見の限り24年後の次の記事が最初である。

[6] いささか旧聞に属するが、センバツで優勝経験のある有力校に敗れたあるチームの  
主将談話。

「強豪だけに名前負けしないよう向かっていった」

「名前負け」を辞書で調べるといずれも「名前が不相応に立派過ぎること。名に実  
が伴わず、かえって劣って見えること」(広辞苑)とある。「二代目は先代に遠く及ば  
ない。名前負けだ」のように使い、談話の「格上の相手にのまれる」用法は誤りだ。

(に) (「冬のあかでみい 誤字から教室③ 御用だ御用！誤用」『毎日』1990.12.19 大  
阪夕刊)

この後は、「間違い言葉」「おかしな日本語」の事例として、「日本語本」などでしばしば  
取り上げられている。

そして、2013年に前掲の日本経済新聞社編(2013)が刊行されると、同年12月16日、辞  
書・辞典サイト『ジャパナレッジ』の連載記事「日本語、どうでしょう？」(神永暁)の  
「第190回「名前負け」は、何に負けるのか？」が公開された。ここでは、日本経済新聞社  
編(2013)を紹介したうえで、自身でもスポーツ紙の高校野球記事中の監督談話に「誤用」  
例を見つけたことを挙げ、

[7] 監督の談話の部分であるため誤用とはわかっていてもそのまま掲載せざるをえない  
という事情はわからなくもないのだが、このまま放っておくとこの誤用がさらに広ま  
ってしまうのではないかと危惧されるのである。

としている<sup>3)</sup>。

そして2015年には、全国紙のウェブ版記事で相次いでこの語が取り上げられた。

まず1月の『朝日』ウェブ版の記事「ことばマガジン クイズ語エ門「名前負け」で負  
けるのは」(1月5日掲載)では、次のように述べる。

[8] 高校野球の監督や選手のインタビューで耳にすることもある「名前負け」。強豪校  
と対戦する際に「相手の名前に圧倒されて負けてしまう」という意味で使われま  
すが、正しい表現ではありません。本来の「名前負け」は「名前が不相応に立派すぎ  
ること。名に実が伴わず、かえって劣って見えること」(広辞苑第6版)。負けるのは  
相手の名前にではなく、自分の名前に、です。伝統芸能で偉大な先人の名跡を継ぐよ  
うな場合はもちろん、プレッシャーに感じるほどの期待が込められた名前を持つとき  
などにも使えますね。 <http://www.asahi.com/special/kotoba/quiz/SDI201504202482.html>

そして「夏の甲子園」の時期になると、まず『毎日』ウェブ版では「校閲発：【ここで間違え】第27回 野球関係用語」（7月7日掲載）の中で、次のように扱っている。

[9] 強豪に「名前負け」→「臆する」「気後れ」など文脈に応じて言い換える（名前負けは名が立派すぎて実物が見劣りすること）<https://mainichi.jp/articles/20150707/org/00m/040/061000c>

続いて、『産経新聞』ウェブ版連載記事「赤字のお仕事」では、「名前負け」の誤用は、夏の甲子園とともにやってくる」（7月26日掲載）という題で取り上げ、次のように述べる。

[10] ある県大会の予選。いよいよ強豪校と当たるチームの監督や主将（キャプテン）に意気込みを聞いた記事を、スポーツ新聞で見かけました。

「実力は決して負けていない。ただ、どうしても名前負けしている。勝手に自滅してしまう」

{中略}「名前負け」とは、本来、「相手の名前を聞いておそれをなすこと」ではなく、「自分に与えられた名前が立派すぎて、自分の実力がまだそこまで達しない」あるいは、「立派すぎる名前をもらって、そのために実力を発揮できない、出世しない」と思うときに使われる言葉です。

{中略} スポーツの世界では、戦う前に相手の「名前」を聞いただけでおじけづいては、勝負になりません。監督が萎縮する部員に「名前負けするな！」と叫びたくなる気持ちもわかります。簡略で力強い言葉ですから。

ただし、伝統的な言葉の使い方からいえば、誤用にあたります。「強豪校に名前負けした」とはせず、「強豪校の名前に圧倒された」と言い換えたほうが正しい用法です。（時）<https://www.sankei.com/premium/news/150726/prm1507260013-n1.html>

さらに、『日本経済新聞』ウェブ版では、「名前負け」の使い方大丈夫？ チャレンジこぼのドリル第16回」（8月12日掲載）の中で

[11] 「名前負け」とは、名前が立派すぎて実（中身）が伴わないために、かえって見劣りすること。近年は例文1）{＝「初出場のA校は昨年優勝の強豪校に名前負けして、初戦で敗退した」}のように、相手の名前が立派なために圧倒される、気後れするという意味で誤用されることも多く、高校野球の記事などで広まっている。<https://style.nikkei.com/article/DGXMZO90212310W5A800C1000000>

とする。

一方、主要な国語辞典でこの語の「誤用」に言及したものは、前掲の『三省堂国語辞典』第7版以外では、『明鏡国語辞典』第2版（2010）、『例解新国語辞典』第8版（2012）、『三省堂現代新国語辞典』第5版（2015）程度である。『広辞苑』は第7版（2018）に至るまで「誤用」への言及はない。

国語辞典ではないが、山根監修（2013：748）では、次のように「正用」を二つに分けて

記述したうえで、「誤用」に相当する意味も挙げている。

[12] ①立派な名前を受け継いだが、実力が伴わない。特に歌舞伎や落語などの伝統文化の世界において、偉大な先代の名前を襲名したが、芸がその名にふさわしい出来映えでない場合に用いられる。②名前が立派なために実物が劣っているように見えてしまうことに使用される。たとえば、人の名前に知能や容姿が優れている意味の漢字が使用されているのに、実際は異なる場合などを言う。商品や店については、①②両方の意味で使われる。なお、スポーツなどで、相手の名前に圧倒されて気持が負けることに使われることもある。

マスコミの「用字用語集」の類ではどうか。NHK放送文化研究所編『ことばのハンドブック』（日本放送出版協会）では1992年刊の初版、2005年刊の第2版ともにこの語は挙がっていない。

時事通信社編刊『最新用字用語ブック』では、1997年刊の第2版にはなかった「名前負け」が、2000年刊の第3版では「間違いやすい語字句」の中に「名前負けする」の形で立項され、

[13] 相手の名前を聞いただけで圧倒される意味に使うのは誤用。名前が立派過ぎて実物が見劣りする意味。(703)

とある。

新聞用語懇談会編『新聞用語集』（日本新聞協会）では、「誤りやすい慣用語句」の中で、1996年版まではなかった「名前負け」を2007年版で立項している。

[14] 名前が立派過ぎて実物が見劣りする意。相手の名前に圧倒される意味で使うのは誤用。(391)

### 3 世論調査

文化庁国語課が毎年度行っている「国語に関する世論調査」では、平成27年度（調査時期は2016年2～3月）に初めて「慣用語等の意味」の調査項目の一つになっている。この語の「誤用」が取りざたされるようになった時期を考えれば、遅かったといえよう。例文はなく、「名前負け」という語だけを示し、「(ア)と(イ)のどちらの意味だと思うか」を尋ねている。その結果は以下のとおりである（数字は％）。

[15] (ア)：名前を聞いただけで気後れしてしまうこと 9.3

(イ)：名前が立派で、中身が追い付かないこと 83.4

(ウ)：(ア)と(イ)の両方 3.5

(エ)：(ア)や(イ)とは全く別の意味 1.7

分からない 2.1

文化庁文化語部国語課（2016：129）で、より細かい回答結果をしてみる。性で見ると、（ア）すなわち「誤用」の回答率は男性10.7%、女性8.1%と男性のほうがやや高いが、それでも10%強にとどまる。年齢では、「誤用」の回答率は、すべての世代で（イ）すなわち「正用」の回答率を大きく下回っているが、20代以上は5.3～11.2%なのに対し、10代（16～19歳）は23.8%と突出して高い。しかし、年齢が上がるほど「誤用」の回答率が下がり「正用」のそれが上がる、というよく見られるパターンにはなっていない。50代以上では、「誤用」の回答率は50代5.5→60代9.7→70歳以上11.2%と、むしろ世代が上になるほど高くなり、60代以上は20代の7.9%を上回っている。

性別と年齢を合わせ見ると、「誤用」の回答率は、男性では10代が32.5%と突出して高く、20代以上は5.4～13.2%の中で上下している。女性はやはり10代が15.9%と最も高いが、それに次ぐのは70歳以上の13.3%で、その間の世代は3.9～8.4%の中で上下している。

この世論調査の結果で見える限りでは、“気がおけない”や“世間ずれ”と比べると「誤用」の勢力はかなり小さいということになる<sup>4)</sup>。

#### 4 「誤用」の発生時期

今日の実態について見る前に、まず「誤用」の発生時期はいつごろか、という問題について調べてみた。

「誤用」が1960年代にまで遡れることは、白石（1966）の指摘どおりである。またこの時期の「誤用」例として、「夏の甲子園」関連の記事からもう1例を得た（『ヨミダス歴史館 明治・大正・昭和』による。なおここではほかに「正用」が昭和戦後に4例（1954.10.17、1962.1.14、1973.7.6、1985.7.13）ヒットした）。1967年の第49回大会で中京（現：中京大中京。愛知代表。前年の優勝校（春夏連覇）で、戦前には3連覇するなど、計6度（この時点で）の優勝経験あり）が9対0で明星（大阪代表。3年ぶり6回目の出場。4年前の優勝校）を破った試合に関するコラムで、元プロ野球選手の中島治康（日本プロ野球初の三冠王として知られる）が、「意外にも一方的な結果となった」原因は「“古豪中京”の名に明星ナインがおびえたことにある」として、最後をこう結ぶ。

〔16〕明星の名前負けという以外ない。（「[9] 敵の“名前”にすくんだ明星」『読売』1967.8.12朝刊）

また『国会会議録検索システム』（国立国会図書館）で検索すると戦後2017年までの12件の会議に計13例が見られるが、すべて「正用」例である。

そこから遡り、明治～昭和戦前のデータベースを調べてみる。『朝日』・『読売』の記事データベース（『聞蔵Ⅱ』『ヨミダス歴史館』）、さらに神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ『神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫』（2018.7.4検索）、国立国語研究所編『日本語歴史

コーパス』(中納言 2.4.2 データバージョン 2018.03)でもこの時期のこの語の例は得られなかったが、『青空文庫』(2018.7.4 検索)では中里介山『大菩薩峠』(「弁信の巻」十三)の例が1例ヒットした。書き下ろしの初出である『大菩薩峠 第十巻』(1932、春秋社)の本文を次に掲げる。牢破りをして逃走していた凶賊「味鉢の子鉄」の素性を解説する文章である。

[17] これを知らないものゝ為に、一応その素性を物語つて見ると、こゝに子鉄と呼ばれてゐる当人は、有名なる俠客会津の小鉄でないことは勿論だが、さりとて、会津の小鉄を向ふに廻しても名前負けのする男ではなかつたのです。{中略}名古屋城外で窃盗を働らいて敵の上領内を追はれたのを皮切りとして、捕まつてまた敵の上に追放——その間に同類をこしらへ、ある時は一人、ある時は同類と諸方を荒し廻つてゐるうちに {中略} 遂に搦め取られて入牢の身となつたのが、安政年間だとかいふこと。(98-99)

悪行を重ねたうえ牢破りまで犯した無法者であるこの「子鉄」について、「有名なる俠客」である「会津の小鉄を向ふに廻しても名前負けのする男ではなかつた」としているのだから、ここの「名前負け」は〈(「会津の小鉄」という)相手の名前に圧倒されること〉と解釈するのが自然である。この例が現時点では「誤用」の文献初出例で、1932年すなわち昭和7年にまで遡れることになる<sup>5)</sup>。

なお「正用」の初出例は、『日本国語大辞典』第2版では有吉佐和子『助左衛門四代記』(1963)の例となっている。しかし、

[18] 琉球でも、善い名を付けると、名前負けするといつてゐるが、これなども邪視を恐れる古代信仰の名残に外ならない。(伊波普猷「琉球人の命名法」『旅と伝説』1933.7:30)

[19] 最近出来たのでは、グランド銀座系統のロトンド、それに名前負けのする西二丁目近くの国際茶房。(瀧のぼる「銀座喫茶店風景」『江戸と東京』1936.1:36。明石書店1991刊の復刻版による。奥付には「昭和十年一月一日発行」とあるが、「昭和十一年」の誤り)

のような「正用」例があるので、『大菩薩峠』と同時期にまで遡れるのは間違いない。

さらに、『言海』『日本大辞書』『日本大辞典言泉』『大日本国語辞典』、そして平凡社『大辞典』といった辞書は立項していないが、『大言海』(1934)は立項し、今日の〔12〕同様、「正用」を二つに分けて記述している。

[20] 分ニ応ゼヌ立派ナル名ヲ名乗リテ、カヘツテ見劣スルコト。名前ハ立派過ギテ、実質ノ伴ハヌコト。又、不熟ノ芸ニテ、名人ノ名ヲ継グナドニ云フ語。

「正用」と「誤用」の初例がほぼ同時期に見られるとなると、いずれが本来の意味なのか、という疑問が生じる。この点の解明に際し重要なのが、“名前負け”に先立ち、“名負け”と

いう語（『日本国語大辞典』第2版には立項されない）の例が、明治期から見られることである。

[21] 又名をつけるのに其子の合性を見るとか、{中略} 亦は名が過ぎると名前負けがするとか云ふ伝説もありますが、是等は誰も知つてゐますゆゑ今は略します。（清水芳子「今古出産の伝説」『女学世界』1906.10：111）

[22] ▲名前負けする 中村梅之助亡父の名を襲いで翫右衛門になつたのはいゝが返つて役が付かないので当人げつそりして「これじや元の名の方がよつぽどいゝや」（『読売』1920.5.9。『ヨミダス歴史館』による）

[23] 次は太陽曹達

お名前は頗る赫灼たるものであるが、其实聊か名前負けの会社である。（「関東関西の財閥鳥瞰（六十五）」『大阪毎日新聞』1923.5.16。『神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫』（人物伝記（2-018））による）

これらはいずれも“名前負け”の「正用」と同じように使われている。このことから、“名前負け”も〈自分の名前に負けること〉の方が本来の意味と考えるのが妥当といえる<sup>6)</sup>。

## 5 今日の新聞記事における実態

今日の実態を明らかにするために、新聞記事を調査した。『朝日』・『毎日』・『読売』各紙の記事データベース、『聞蔵II ビジュアル』・『毎索』・『ヨミダス歴史館』を利用し、2002～2017年の16年間の記事（著作権上の理由で本文が見られない記事は除く）を調査した結果が表1である。『聞蔵II ビジュアル』は、1997年1月の時点で各本社版と全国の県庁所在地版が対象となっており、その後それ以外の地域版も順次追加されている。『毎索』は、本社・支社、そして全地方版（東京多摩除く）の記事が対象となるのは1999年分からである。『ヨミダス歴史館』は、すべての本社版・地域版が対象となるのは2001年3月以降である。そこで、2002年以降の記事を対象とした（なお、各紙とも沖縄の地域版は存在しない。「？」は正誤のいずれか判定が困難な例である<sup>7)</sup>。また、前掲の〔1〕のようなこの語の「誤用」自体が話題になっている記事（後掲）は「☆」欄にその件数を示した。その中の例は表中の数字には入っていない。

調査の結果、〔3〕で指摘したのと同じく、スポーツ関連、特に高校野球関連の記事に用例が集中していた。そこで、表1では、各紙での用例を「正用」と「誤用」とに分けたうえでさらに「スポーツ関連」と「スポーツ以外」とに分け、前者については高校野球関連の記事の例の数を（ ）内に示した。そして地の文と会話文（心話文含む）とに分けて集計した。なお、〔26〕のような例も「会話文」とした。異論もあろうが、〔24〕のような「 」でくくられた典型的な「会話文」にしても、発話内容そのままではなく原稿化の過程で何らかの加

工が加えられている。そこで〔26〕のような例も「会話文」として処理した。また、「正用」の「スポーツ以外地」には、川柳での例が『朝日』に4例、『毎日』に11例、『読売』に5例の計20例含まれる。

用例総数は、『朝日』が『毎日』と『読売』を大きく上回っている。またそれに占める高校野球関連の例の比率は、『朝日』は61.11%、『読売』50.00%、『毎日』36.64%の順である。いずれにおいても『朝日』が他を大きく上回っているのは、高校野球の中でも特に注目度の高い「夏の甲子園」に関し、主催者である『朝日』が、地方予選も含め全国版・地方版ともに最も力を入れて報じていることが大きな要因と思われる。

3紙合計では、全体では「誤用」例の数が大きく上回っている。そして、スポーツ関連では全366例中「誤用」が331例(90.44%)で「正用」は35例、スポーツ以外では全156例中「正用」が149例(95.51%)で「誤用」は7例と、正反対とあってよい結果になっている。また地の文と会話文での「誤用」の出現率を見ると、地の文では35.56%(135例中48例)なのに対し会話文では75.52%(387例中290例)と、会話文が地の文の2倍以上にのぼっている。

では、実際の実例を見ていく(以下、各用例の所在記事名の示し方は各データベースの表示に従う)。まずスポーツ関連の「誤用」例である。

〔24〕ショートトラック女子五百メートルで、中国のメダル独占を止めたのは、伏兵り・ヒャンミ。〔中略〕日本の川上隆史監督は「体はできているし、一流ぞろいの中国選手に名前負けせず、4対1で立ち向かう根性もある。日本の選手だったらつぶれていた」と実力を認める。〔「青森冬季アジア大会」第6日 女子モーグル 上村、大技きっちり「金」』『読売』2003.2.7 東京朝刊〕

〔25〕試合前、大会屈指の本格派ダルビッシュ有に名前負けしてはいけないと、ナインに「同じ高校生。打てないはずはない」と繰り返した。〔「全国高校野球17日 千葉経大付、粘りの逆転 紫のスタンド大歓声＝千葉」』『読売』2004.8.18 東京朝刊 京葉〕

〔26〕◇粘りはさすが——大長秀行・神村学園主将

自分たちはすべてが初めて。伝統校との対戦だったが、名前負けせず、相手がどこだろうと関係ない、神村野球部の歴史を作るんだと意気込んでいた。〔「第77回センバツ高校野球：神村学園、歴史に輝く一步／鹿児島」』『毎日』2005.3.30 地方版／鹿児島〕

〔27〕次の相手は昨年の覇者・東北福祉大だ。「名前負けせず、気持ちでぶつかるだけ」との言葉に、強豪を脅かす自信すらのぞかせた。〔「全日本大学野球選手権 白鷗大、初出場で勝利 きょう東北福祉大戦＝栃木」』『読売』2005.6.8 東京朝刊 栃木2〕

〔28〕次の準々決勝は、古豪・PL学園と対戦する。「名前負けしないよう、チームを盛

表1 新聞における“名前負け”の用例数（☆のみ記事の件数）

新聞	西暦	「正用」				計	「誤用」				計	☆		
		スポーツ 関連地	スポーツ 関連会話	スポーツ 以外地	スポーツ 以外会話		スポーツ 関連地	スポーツ 関連会話	スポーツ 以外地	スポーツ 以外会話				
朝日	2002			3	3	6	2(2)	15(13)			17(15)		23(15)	
	2003			1	2	3		12(12)			12(12)	1	16(12)	
	2004	1		1	2	4	3(3)	20(18)			23(21)		27(21)	
	2005		1	4		5	3(3)	19(18)	1		23(21)		28(21)	
	2006		2	2	1	5		20(15)			20(15)		25(15)	
	2007	2		3		5	3(3)	13(13)			16(16)		21(16)	
	2008		1		2	3	4(3)	11(7)			15(10)		18(10)	
	2009	1	2	3	5	11	4(4)	13(13)			17(17)		28(17)	
	2010				1	1	1(1)	12(10)			13(11)		14(11)	
	2011	2			4	6		4(3)			4(3)		10(3)	
	2012			5	1	6							6	
	2013		2	3	1	6							6	
	2014			1		1		1(1)			1(1)		2(1)	
	2015		1			1		1(1)			1(1)		2(1)	
	2016		1	3	1	5							5	1
	2017				3	3							3	
	計	6	10	29	26	71	20(19)	141(124)	1	0	162(143)	1	234(143)	1
毎日	2002		1	4	4	9	1(1)	7(4)			8(5)		17(5)	
	2003	1		1	5	7	1(1)	6(2)	2		9(3)		16(3)	
	2004			1	1	2	3(2)	5(3)			8(5)		10(5)	
	2005			2	1	3	1(1)	3(2)			4(3)		7(3)	
	2006			1	1	2		4(3)			4(3)		6(3)	
	2007			3	4	7		6(5)			6(5)		13(5)	
	2008	1		2	3	6	2(1)	7(6)			9(7)		15(7)	
	2009			2		2	1(1)	1			2(1)		4(1)	
	2010		2	2	1	5		5(5)			5(5)		10(5)	
	2011	1(1)	1(1)			2(2)		1			1		3(2)	
	2012			2		2		1(1)			1(1)		3(1)	
	2013		3(1)	1	2	6(1)		4(4)		1	5(4)		11(5)	1
	2014			3	1	4	1	1			2		6	
	2015			1		1		2(2)			2(2)		3(2)	
	2016			1		1			1		1		2	
	2017			4		4		1(1)			1(1)		5(1)	
	計	3(1)	7(2)	30	23	63(3)	10(7)	54(38)	3	1	68(45)	0	131(48)	1
読売	2002			2	1	3		4(4)			4(4)		7(4)	
	2003					0	2	12(10)	1		15(10)		15(10)	
	2004	1	2	1	2	6	4(3)	5(2)			9(5)		15(5)	
	2005			2	4	6		8(4)			8(4)		14(4)	
	2006					0	2(2)	16(12)			18(14)		18(14)	2
	2007		2(2)	2	5	9(2)		10(6)			10(6)		19(8)	
	2008				2	2		8(4)			8(4)		10(4)	
	2009	1	2			3	1	6(5)			7(5)		10(5)	
	2010			3		3	1(1)	8(7)			9(8)		12(8)	
	2011			1	1	2		5(5)			5(5)		7(5)	
	2012			3	2	5		6(5)	1		7(5)		12(5)	
	2013		1(1)	1	2	4(1)	1(1)	4(3)			5(4)		9(5)	
	2014			1		1	1(1)	2(1)			3(2)		4(2)	
	2015				1	1							1	
	2016				1	1							1	
	2017			1	3	4							4	1
	計	2	7(3)	17	24	50(3)	12(8)	94(68)	2	0	108(76)	0	158(79)	3
3紙計	11(1)	24(5)	76	73	184(6)	42(34)	289(230)	6	1	338(264)	1	523(270)	5	

り上げたい」。(「選抜高校野球30日 粘って12回、サヨナラ打 秋田商2年ぶり8強=秋田」『読売』2006.3.31 東京朝刊 秋田)

[29] 福島東は昨夏の選手権大会3回戦と今春の地区大会で聖光学院を破るなど、強豪校相手にも名前負けしない。(「序盤から好ゲーム 1、2回戦の球場・日時決まる 第89回高校野球福島大会/福島県」『朝日』2007.6.23 朝刊 福島全県)

[30] 創価の中安祥主将は「相手は3年連続出場の名門だが、名前負けは絶対しない」と闘志を燃やし、「投手を中心にリズムを作って、自分たちの守る野球をしたい」と話した。(「全国高校野球 名電さあ進撃だ 「気分楽に、まず1勝」石黒主将=愛知」『読売』2007.8.6 中部朝刊 名市内)

[31] 「相手がどんなに実績のある選手でも、名前負けしたことはない」と松永はいう。(「55キロ級・松永が銀、60キロ級・湯元は銅 レスリング男子2008北京五輪」『朝日』2008.8.20 朝刊)

[32] 尾島治信監督は「相手は力のある学校だが、プレーをするのは同じ高校生同士。名前負けしないよう自信を持って臨みたい」と話した。(「成田、初戦は智弁和歌山大会初日・第2試合 強豪相手「楽しみ」高校野球/千葉県」『朝日』2010.8.5 朝刊 ちば首都圏)

[33] 加古川北は今夏の甲子園でベスト4入りした報徳学園に快勝し、初の決勝。福村順一監督は「理想的な展開だった。強豪私学に名前負けすることなく戦えた」と選手をたたえた。(「神戸国際大付、決勝へ きょう加古川北と 県秋季高校野球/兵庫県」『朝日』2010.10.11 朝刊 神戸)

順に、「一流ぞろいの中国選手」「大会屈指の本格派」「伝統校」「昨年の覇者」「古豪」「強豪校」「3年連続出場の名門」「実績のある選手」「力のある学校」「強豪私学」と評価されるような相手に対し「相手の名前に押され気持ちで負けてしまうこと」という意味で使われている。このうち [24]・[27]・[31] 以外のような高校野球関連の例は331例中264例と79.76%を占める。

スポーツ以外では、「誤用」例は [34]・[35] などわずか7例にとどまる。

[34] 八年前の七月、まだ五段のころ、当時、棋聖だった小林覚九段と初めて対戦した。対局中は「白昼夢を見ているような気分」で、完敗した。{中略} 典型的な格負け、名前負けを糧に、以後の対局には無心で臨むことにした。(「[ほっぷ・すてっぷ] (3) 囲碁棋士・天元 腹八分勝負の心 (連載) =愛知」『読売』2003.1.4 中部朝刊 名市内)

[35] 自民党の総裁選も迫っています。「小泉」といった現総理を相手に反小泉勢力も候補がなかなか絞り込めないようです。名前負けしたというわけではないのですが、名前が出ては辞退していくといったことが見られます。(「[肥前つれづれ]

行く夏に思う／佐賀』『毎日』2003.8.25 地方版／佐賀)

次に、「正用」例である。スポーツ関連の全 35 例中、高校野球関連の例は〔40〕など 6 例しかない。

〔36〕「自分が成し遂げられなかったインターハイ制覇を」と後輩にかける思いは強い。部員が「赤鬼」と呼んでいるのを知り、「名前負けしないように、もっと厳しくしなくちゃ」と奮起したほどだ。(「[青森再発見] 夢を引き継ぐ・今別町の剣士たち／5 止 次代へ／青森」『毎日』2002.1.31 地方版／青森)

〔37〕目下、無敗の 2 連勝。王朝時代のハワイに登場した英傑の名をいただいた馬だが、内容的にも「名前負け」はしていない。(「[この一頭] 第 44 回京成杯 キングカメハメハ」『読売』2004.1.17 東京夕刊)

〔38〕東北学院大の星孝典捕手が、巨人の六巡目選手として指名された。〔中略〕会見で、漫画「巨人の星」に話題が及ぶと、少し照れながら、「巨人で(星という名前は)初めてみたいです。名前負けしないように頑張ります」と決意を新たにしました。(「初のドラフト会議 楽天イーグルス、即戦力 6 人獲得＝宮城」『読売』2004.11.18 東京朝刊 仙台)

〔39〕今場所から「式守脩」を改名して「式守鬼一郎」を襲名した。角界では 46 年ぶりに登場する伝統の名で、期待の高さがうかがえる。「名前負けしないように頑張る」(「十両格行司に出世 佐賀出身・和智さん、式守鬼一郎を襲名／佐賀県」『朝日』2006.3.21 朝刊 佐賀全県)

〔40〕◇ 9 回に逆転三塁打を放った 斎藤祐輝左翼手 (山形商 3 年)

〔中略〕“ハンカチ王子”こと、早大の斎藤佑樹投手と氏名の読みが同じ。当然、まず名前が注目される。「目標の甲子園に向け、名前負けしないように」と決意を新たにしました。(「全国高校野球県大会 米沢商、逆転サヨナラ 酒田南、コールド発進＝山形」『読売』2007.7.15 東京朝刊 山形南)

それに対し、スポーツ関連以外の「正用」例は〔41〕～〔43〕など 149 例に及ぶ。

〔41〕草木には犬…、馬…、鬼…などと言ったように、あまり良いとは思えない名が多い中で、こんなに立派な名前が付いている植物がほかにあまりありません。人だったら「名前負け」するとでも言われそうです。(「縁起の良い「富貴草」 樋口孝城 (ネイチャー街道)／北海道」『朝日』2002.1.9 夕刊 北海道)

〔42〕九代目林家正蔵、六代目柳家小さんら、大名跡の襲名が注目されている。継承者の肩には、先代たちが築き上げてきたブランドを守りつつ、乗り越えるという使命がのしかかる。芽が出なければ「あれは名前負けした」と陰口を言われることになる。(「[落語に生きる] (5) 徂徠豆腐 大名跡、使命と重圧 (連載)」『読売』2005.11.26 東京朝刊 都民)

[43] 来年4月打ち上げ予定の米スペースシャトルに搭乗する宇宙飛行士の星出彰彦さん(38)が4日、伊吹文明文部科学相を訪問した。〔中略〕伊吹文科相が「星出という名字は宇宙飛行士にふさわしい」と話しかけると、星出さんは「名前負けしないようにがんばりたい」と応じた。(「宇宙飛行士・星出さん：文科相を訪問」『毎日』2007.6.5 中部朝刊)

[44] 倉敷・美観地区にある鶴形山にちなみ、尊敬する彫刻家から「鶴山」の名を受けた。「名前負けしないよう、命をかけて励んだ」(「(美を継承する 日本伝統工芸展岡山展：中) 木工芸・林鶴山さん／岡山県」『朝日』2008.11.30 朝刊 岡山全県)

[45] 「リン・カンケツ(林漢傑)」。響きのいい名前だ。漢(おとこ)の中の傑物。「名前負けしているといわれます」と語るが、そんなことはない。(「思い出の地で 第36期名人戦挑戦者決定リーグ戦第11局・第1譜」『朝日』2011.3.8 朝刊)

[46] 名前は「美しく奏でる」。「名前負けしないように頑張ります」とはにかんだ。(「[気鋭・新鋭] 持ち前の表現力に自信 オーボエ奏者 荒木奏美さん(22)」『読売』2015.11.28 東京夕刊)

最後にこの語の「誤用」自体に関する記事は、『読売』に〔47〕・〔49〕など3件(もう1件は、〔47〕の前日の同欄で、次回予告の中にこの語が現れる)、『毎日』に〔48〕の1件ある。『朝日』にも1件(2016.9.22朝刊)があるが、3章で取り上げた「国語に関する世論調査」の結果が表の形で挙がっているのみで、記事本文での言及はない。

[47] ◎姓は豊臣、名は家康

「共演者是有名女優だが、名前負けしないよう頑張りたい」といった使い方は間違い。相手の名前に恐れをなし、聞いただけで負けそうな気がするということではない。有名な科学者と同じ名なのに数学が苦手、名力士のしこ名を継いだが負け越しばかり——など、自分に付けられた名前が立派すぎて、能力・実質がそれに及ばないという意味だ。

似た言い方に「位負け」がある。実力以上の地位や評価を与えられている場合に使われる言葉。ただしこちらは、相手の地位や人格が立派なため、圧倒される場合にも言う。(「[日本語・日めぐり] 名前負け」『読売』2006.8.1 東京朝刊)

[48] 春到来、選抜高校野球が22日に開幕する。野球に限らず初出場のチームが強豪と対戦する場合、主将の談話で「名前負けしたら、そこで終わり。相手の名前を意識せずに戦うだけです」というのが、たまに出てくる。挑戦者らしい意気込みは良いのだが誤用だ。「名前負け」とは「名前が不相応に立派すぎる。名に実が伴わず、かえって劣って見えること」(広辞苑)で、「彼は名前負けしている」を英語にすると「He doesn't live up to his name.」。「名前負けしない」は、自分の名前に負けない(恥じない)行動をするという意味で、相手の名前にひるまないことではない。伝統芸能な

どで「先代の名をもらって名前負けする」のように使う。生の声をできるだけ尊重しつつも、本人の名誉のためにも、誤りは発言の趣旨を変えない範囲で正したい。【平松隆博】（「字件ですよ！：「事件」では？ 敵ですから……／思い込みの落とし穴／まずは己に勝つ！」『毎日』2013.3.2 大阪朝刊）

[49] 見事、初戦を突破して、インタビューを受けたキャプテン。「次の対戦相手は、昔からスポーツの強豪校として知られているあの学校ですが……」と聞かれたので、「名前負けしないように頑張ります」と答えたら、ちょっと首をかじげられてしまいました。なぜでしょうか。

相手の名前を聞いたくらいでおじげづいたりしないぞ、と気を込めたつもりで言ったのですが、「名前負け」の意味が違います。

「名前負け」は、名前にふさわしい中身が伴っていない場合に使う言い方です。たとえば——戦国武将のように勇ましい漢字が並んだ名前なのに、気弱でお人よし。発明した秘密兵器をウルTRASUPERデラックスマシンと名付けたけれど、スイッチを入れただけで壊れた——といったように、名前 VS 中身の勝負で、中身が名前に負けてしまうのが「名前負け」です。相手の名前に恐れをなし、聞いただけで負けそうな気がするというものではありません。

決意の程は、「名前に圧倒されずに頑張ります」、あるいは、「相手は名前こそ知れ渡っているかもしれないけれど、こちらも実力では負けません」などと表明してはどうでしょう。（関根健一）（「[なぜなに日本語] (361) 「名前負け」誰にするの？」『読売』2017.8.9 東京朝刊）

## 6 考察

では、そもそも「誤用」はどのような理由で生まれたのであろうか。ここで再度前章の「正用」の例を見ると、「自分の名前に負ける」とはいいながら、その名前は、偉大な先人が名乗ってきた伝統の名跡であったり（〔39〕・〔42〕）、歴史上の大人物の名前であったり（〔37〕）、同じ分野で実績のある先人の名前であったり（〔38〕・〔40〕・〔44〕）と、「他人の名前」でもある場合が少なくないのである。そのような、〔12〕の①に相当する「正用」の場合は、〈自分の名前に、自分の実質が負ける〉ということは〈自分と同じ名前の他人の実質に、自分の実質が負ける〉ということにほかならない。つまりこれらの「正用」例の中には、〈他人に負ける〉という「誤用」との共通点がすでに存在しているのである<sup>8)</sup>。

さらに、複合語“名前負け”を開いた形の「名前に負ける」というコロケーションの例を、表1と同期間（2002～2017年）の新聞記事データベースで調査した結果が表2である。表の見方は表1と同じで、「☆」欄にあるのは、前掲の〔48〕・〔49〕の記事である。この中の例

は表に入っていない<sup>9)</sup>。

**表2 新聞における「名前に負ける」の用例数（☆のみ記事の件数）**

新聞	自分の名前に負ける					相手の名前に負ける					?	計	☆
	スポーツ 関連地	スポーツ 関連会話	スポーツ 以外地	スポーツ 以外会話	計	スポーツ 関連地	スポーツ 関連会話	スポーツ 以外地	スポーツ 以外会話	計			
朝日	5(1)	4(2)	16	12	37(3)	2(1)	40(35)	0	3	45(36)	1(1)	83(40)	0
毎日	3	3	8	6	20	7(4)	34(22)	1	4	46(26)	0	66(26)	1
読売	3(2)	4(1)	5	25	37(3)	3(3)	22(14)	1	4	30(17)	0	67(20)	1
<b>3紙計</b>	<b>11(3)</b>	<b>11(3)</b>	<b>29</b>	<b>43</b>	<b>94(6)</b>	<b>12(8)</b>	<b>96(71)</b>	<b>2</b>	<b>11</b>	<b>121 (79)</b>	<b>1(1)</b>	<b>216 (86)</b>	<b>2</b>

これからわかる通り、全 216 例中、〈自分の名前に負ける〉が 94 例で、うち [50] のようなスポーツ関連が 22 例、[51] のようなそれ以外が 72 例である。一方、〈相手の名前に負ける〉は 121 例で、うち [52] のようなスポーツ関連は 108 例、[53] のようなそれ以外のものが 13 例となっている。

[50] 尾車親方は {弟子の皇風に} 「王の上に白星を重ねて皇となってほしい。名前に負けないように頑張ってもらいたい」と期待を込めた。(「大相撲秋場所 9人、一気に十両へ 若い力期待」『毎日』2011.8.5 東京夕刊)

[51] 灯さんが生まれた時、「周囲をほんわか照らす子になって」と名付けたことを振り返り、「名前に負けず、その通りの子になってくれました」。(「事故で後遺症 少女の挑戦 加藤さん作文「総理大臣賞」＝福岡」『読売』2015.12.9 西部朝刊 福岡)

[52] 「本土のチームと聞いただけで名前に負けていた時代があったが、今の子どもたちには全くない」(「知りたい!! 沖縄野球、50年の実り 強豪校と強化試合、施設も充実」『毎日』2009.11.25 東京夕刊)

[53] 「光栄に感じるとともに、プレッシャーも感じています。『砂の器』という名作の名前に負けないように頑張りたい」(「中居正広「名作に負けないように」——TBS系「砂の器」」『毎日』2004.2.2 東京夕刊)

「～の名前に負ける」というコロケーションであれば、自分の名前でも相手の名前でも「正用」である。しかしそれが“名前負け”と一語化すると、〈自分の名前に負ける〉という用法のみが「正用」とみなされるのである。「名前に負ける」の場合、〈自分の名前に負ける〉と〈相手の名前に負ける〉の用例数を比べると、スポーツ関連では 22 対 108、それ以外では 72 対 13 と、“名前負け”の場合と同様、正反対と言ってよい状況である。その理由は、筆者がかつて [3] で述べたとおり、〈相手の名前に負ける〉かどうかが問題になるケースの方が、スポーツの世界、中でも高校野球など学生スポーツの世界でははるかに多いからであろう。プロと比べると学生スポーツではチーム間・選手間の実力差が大きいうえ、強豪校・選手と弱小校・選手とが同じ条件で戦うケースが多いため（シードという制度はある

が)、「名前」に差がある対戦が実現しやすい。その結果、この世界では「名前に負ける」とは〈相手の名前に負ける〉ことである、という認識が強くなり、それは一語化した“名前負け”にも適用された。「文の中での意味機能が、使用のくりかえしの中で、しだいに単語の意味機能としてやきつけられていく」(工藤 1982: 71) といういわゆる「やきつけられ度」という観点をあてはめることができる<sup>10)</sup>。

「誤用」の表す意味を他の語で言い換えるなら“位負け”“格負け”といったところになるが、学生スポーツでは相撲の番付やボクシング・テニス等の世界ランキングのような明確な「位」「格」が存在している場合は少ない。その代わりに、“〇〇(「甲子園」「花園」「インターハイ」など)常連校”・“名門”・“伝統校”そして“古豪”(1960年代の「誤用」例〔5〕・〔16〕がある記事では、「名前負け」をさせた側の高校には「四国の古豪徳島商」・「古豪中京」といづれも“古豪”が冠されている)といったかなりの程度主観的な「思い入れ」の要素が加わった修飾語が、対戦相手の「名前」と不可分になっている場合が少なくないのである<sup>11)</sup>。第3章で見たとおり、「国語に関する世論調査」では10代で「誤用」の回答率が突出して高いが、これは学生スポーツの当事者(やる側であれ、応援する側であれ)世代である、ということの影響があるといえる。

その中で特に高校野球関係の用例が多いのは、学生スポーツの中で最も新聞報道の量が多い分野(「春のセンバツ」は『毎日』、「夏の甲子園」は『朝日』と新聞社自らが主催しているという背景もある)のためと考えられる。

次に挙げる〔54〕は、“名前負け”の「誤用」を「勝負の世界」の用語としている。

〔54〕 勝負の世界に「名前負け」という言葉がある。実績のある相手に力を出し切れな  
いまま敗れることである。羽島北の場合も、選手の機敏な振る舞いに加え、独り歩き  
をしたイメージが「この学校は強い」という先入観を相手に与え、戦う前から精神的  
に優位に立つことがしばしばあった。(「ぎふ名将列伝(3) 羽島北高フェンシング部  
渋谷晴雄監督 渋谷マジックで“3冠”」『中日新聞』1995.6.7 岐阜総合)

地方紙(ブロック紙)のさらにその一地方版の記事ではあるが、スポーツの世界でこの語の「誤用」が一種の「集団語」として機能していることを指摘している。

『読売』の校閲部記者である島津暢之は、島津(2008)で、「一般語の原義とスポーツ報道で使う場合の転義の認知度・理解度に差があるもの」の例として、“かわす”が「ゴール直前で二人をかわして優勝」のように〈追い抜く〉の意で使われたり、本来〈(優勢な側の)追い討ち〉という意の“追撃”が「追撃及ばず 常勝の早大敗る」のように〈(劣勢な側の)追い上げ〉の意で使われる、といったケースについて論じたのち、

〔55〕 一般語の意味が変容して(あるいは、組み合わせ違って新しい意味を表しつつ)ス  
ポーツの世界で使われているものが、再び一般語として使われるという、いわば「逆  
輸入」現象も起きている。{中略} こうした際、スポーツの言葉としての意味の定着

が十分でないと、言いたいことがうまく通じなかったり、本来の一般語の意味との衝突が起こったりする可能性があるだろう。(62)

とする。“名前負け”の「誤用」も、「一般語の意味が変容して」「スポーツの世界で使われている」例であるとすれば、今後一般社会の方へ「逆輸入」されることになる——つまり、スポーツ以外の場面でも「誤用」の勢力が大きくなる——のであろうか。

次章では、今後この語はようになっていくのかについての展望を述べる。

## 7 今後の展望

ここでもう一度表1で各紙の「誤用」例の数を見てみよう。『朝日』は2010年までは毎年二けたであったが2011年には4例と急減、2012年以降は6年間合計でわずか2例にとどまっている。2002年以降一けたが続いていた『毎日』は、2011年以降は2013年を除き毎年2例以下になっている。『読売』も2007年以降は減少傾向が見られ、2015年以降は1例も見られない。2010年の〔3〕時点では把握できなかったこのような変化は、何を物語るのか。

ここで、この語の「誤用」を指摘した同じ『毎日』の1997年の〔1〕と2013年の〔48〕とで、その末尾に示された、選手等の発言中に現れる「誤用」への対応を比べてみる。〔1〕では「{選手の肉声を}「誤用」のまま掲載してよかったのかどうか。話し言葉も、活字になった場合、どうチェックするのか……悩みは尽きません」と姿勢が定まっていない。ところが、〔48〕では「生の声をできるだけ尊重しつつも、本人の名誉のためにも、誤りは発言の趣旨を変えない範囲で正したい」と姿勢が明確になっている。16年の間に、「規範に合わせて発言を修正する」という方向へスタンスが変化したことが感じられるのである。新聞で「誤用」が紙面に現れなくなってきたのは、『毎日』に限らず、このような校閲のスタンスの変化があるためではないか。選手らの実際の発言には依然この語の「誤用」が現れていたとしても、記事化の際には別の表現に置き換えたり、その部分をカットしたりするようになった、ということである<sup>12)</sup>。

一般紙の中でも、スポーツ関連の記事は他分野の記事に比べ、見出しで語呂合わせ等の言葉遊びを多用するなど用語の自由度が高い（言い換えれば、「正しい日本語」観点での校閲が緩い）傾向がある。しかし、“名前負け”に関しては、各紙で時期や程度は若干異なるものの、「もうこれまでとは違い「誤用」の意味では使わない」という方向への校閲スタンス、規範意識の変化が明らかに感じられるのである。

新聞各社編刊の用字用語集で“名前負け”を見てみると、『毎日新聞用語集』では、1996年刊の「新版」には出ていないが、2002年刊の「最新版」から「誤りやすい慣用語句」の一つとして挙げ、

〔56〕名が立派すぎて実物が見劣りすること。「対戦相手が昨年の優勝校だからといって

名前負けしないよう頑張る」などを使うのは誤り (379)

とする。『毎日』の記事では、表1の期間の直前3年について見ると、「誤用」の用例数は14例→19例→16例と推移しており、2002年に一度急減していたことになる。

『読売新聞用字用語の手引』では、2005年刊の初版では「用字用語」の中に立項され「名前が立派すぎて、実質が及ばない」とあるが、「誤りやすい慣用語句、表現」の中にはない。「誤りやすい慣用語句、表現」の一つとして挙げられるのは2008年刊の「改訂新版」からで、ここでは

[57] 名前が立派すぎて実物が見劣りすること。相手の名前に圧倒される意で使うのは誤用。(385)

とある。

いずれも、時期的に、用字用語集で取り上げたことと紙面での「誤用」例の減少とが関連しているように思える。

一方『朝日新聞の用語の手引』は他に遅れ、「誤りやすい慣用語句・表現・表記」の中に2010年刊の版まではこの語はなく、2015年刊の「新版」で初めて掲載している。

[58] 〈名前負け〉強豪校に名前負けする→強豪校の名前に圧倒される▽「名前負け」は名前だけ立派で実物が見劣りすること。相手の評判に気後れすることではない。(612)

『朝日』の場合、2010年までは毎年二けたの数見られた「誤用」例が2011年に急減しており、この時期に何らかの契機があって、「“名前負け”を「誤用」しないようにする」というある種の意味統一が地方支局も含めてなされたことが明確に感じられる。しかし、「用字用語集」での扱いを見ると、2011年の前年2010年版の『用語の手引』にはその兆候は見られない。

筆者は以前、新聞における“役不足”という語について、20世紀中は各紙に目立った〈役目に対し能力が不足していること〉という意味の「誤用」例が21世紀に入って以降ぱったりと見られなくなったことを示した。そして、この変化には、この語の「誤用」が『放送で気になる言葉』という冊子や、「国語に関する世論調査」で取り上げられ、それが記事になったことが影響していると思われる、とした(新野2011:28-31)。しかし、“名前負け”の場合、2011年以降に見られる「誤用」の顕著な退潮の契機が、2016年に初めて調査とその結果の公表があった「国語に関する世論調査」でないことは明らかである。では、その契機とはなんであったのか(2010年の〔3〕なのではないか、というのは、手前味噌であろうか)。

ともあれ、一般紙では、“名前負け”の「誤用」はその大半が現れていたスポーツ関連記事に出てこなくなってきた。そうすると、今後はスポーツ界の「集団語」としては残るとしても、その外への浸透・拡大(島津のいう「逆輸入」)が進むとは考えにくい。つまり、

一般社会では〈自分の名前に負けること〉、スポーツの世界では〈相手の名前に負けること〉という意味で主に使う、という状況が当面は続くということである<sup>13)</sup>。

ただし、新聞記事に「誤用」が現れなくなる、という傾向が今後さらに進むと、習得の機会が減るため、スポーツ関係者の「誤用」の使用も衰退する、という変化が中長期的には起きることも予想される。しかし、代わって「正用」の用例数が増えているというわけでもない。「誤用」例の出現が減り「正用」例も増えない、という傾向が新聞記事以外でも見られるとすれば、「誤用」の衰退にとどまらず、この語自体が「死語（廃語）」化する方向に向かっていくということもあり得る。この点については新聞以外の資料の調査も必要である。

最後に、新語・新用法の体系的研究の観点から、ひとつの可能性を示唆する。“役不足”やこの語のように、新聞記事である時期までは多く見られた「誤用」（とされる新用法）が急に見られなくなる、という事例をさらに集め、「用字用語集」での扱いや「国語に関する世論調査」との関係などを調べ、なんらかの傾向を見出せれば、メディア論や国語政策論の観点からも、非常に興味深いことである。しかし現時点では、今後の課題ということになる。

## 注

- 1) 言語において「正しい」「誤り」とはどういうことか、というのは容易に結論の出せる問題ではないが、本稿で使うカギカッコ付きの「正用」とは、〈辞書や「日本語本」等で、「このような意味（用法・形式）で使うのが正しい」とされているなどして、「正しい」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方〉、同じく「誤用」は〈辞書や「日本語本」等で、「このような意味（用法・形式）で使うのは誤りである」とされているなどして、「誤りである」という意識が社会一般に相当程度定着しているような使い方〉とする。
- 2) 現代語の「誤用」は、見坊豪紀の「ワード・ハンティング」の成果を記録した見坊（1976、1983）などの著作で言及されているケースも多いが、この語は取り上げられていない。
- 3) この連載はのちに神永（2015）として書籍化され、この記事は192-193ページに収められた。
- 4) “気がおけない”・“世間ずれ”の「誤用」については、新野（2013、2016）参照。
- 5) 『日本国語大辞典』に掲載されていない用例を一般から募っている、辞書・事典サイト『ジャパンナレッジ』掲載の「日国友の会」では、この例が「正用」例として投稿されている（<http://japanknowledge.com/tomonokai/card.html?id=118075> 2016年9月28日公開）が、「誤用」例と考えるべきである。
- 6) ここに挙げた用例のうち、[18]・[19]・[21]は「Google ブックス」（2015年7月）の検索機能を利用して採集した。田野村（2016）ではこのWeb コーパスを使ううえでの注意事項を具体的に示し、結論として以下のように述べている。

[59] 実際に使ってみれば分かる通り、Google ブックスによる語句の検索結果は精度が低く、表示される検索結果の大半が不要のものであるということも多い。文字認識の誤りにより、あるはずの用例が見つからないという場合もある。また、そもそも Google ブックスにあらゆる出版物が収められているわけではないので、その意味でも不完全な調査しかできない。しかし、それでも Google ブックスを使わなければ得られない情報を豊富に入手できることの意義はきわめて大きい。検索結果から無用のものをふるい分け、有用である可能性のあ

るものを書籍現物によって確認するという労力を費やせば、Google ブックスは近現代語の研究のための強力な情報源となる。(341)

田野村が指摘する「Google ブックス」の欠点は、これまで利用してきた筆者も同感である。しかし、「Google ブックスを使わなければ得られない情報を豊富に入手できる」のは確かで、白石 (1966) の存在もこれにより知った。筆者は、田野村が書いているような「労力を費や」し、確認できた情報のみを使用している。

なお、[23] の例の採集に利用した『神戸大学経済経営研究所新聞記事文庫』については、末田・花崎 (2018) を参照。

- 7) 当該の例は、「名前負けするなと親の低い声」(「歌壇・俳壇・柳暖／宮城」『朝日』2003.6.18 朝刊 宮城2) という川柳での例である。〈自分のつけてやった名前に負けるな〉という「正用」の例の可能性が高いと考えるが、「誤用」例の可能性も捨てきれない。
- 8) “○○負け”という複合語は多くあるが、“夏負け”・“カミソリ負け”・“漆負け”などは、〈○○(夏、カミソリ、漆)という相手の持つ武器・威力(夏の暑さ、カミソリや漆の刺激)に自分が負ける〉ということである。それに対し、“気合い負け”・“力負け”・“根負け”などは、〈相手の持つ○○(気合い、力、根)という武器・威力によって自分が負ける〉ということである。“名前負け”の場合「正用」は前者(「自分の名前」という相手の持つ威力(イメージや迫力、実績など)に自分の実質が負ける)、「誤用」は後者(相手の持つ「威圧感や知名度のある名前」という武器によって自分が負ける)と考えるべきである。
- 9) 「？」欄の例は、「智弁和歌山」に名前に負けしないようにと思う(「(GO!GO!シガガク!!) 智弁和歌山ときょう対戦 両監督対談 高校野球／滋賀県」『朝日』2009.8.14 朝刊 滋賀全県) である。下線部は、添付されている紙面の画像でもこうなっている。「智弁和歌山」の対戦校の監督の発言であり、「名前に」の「に」が衍字で本来“名前負け”の「誤用」例である、という可能性が高いが、今回はここに収めておく。
- 10) 語の意味と「やきつけられ度」との関連に注目した文献としては、「プラス化・マイナス化」との関連を示唆した小野 (1984) などがある。
- 11) “古豪”について、内館 (2012) では、「高校野球に限って使われる。陳腐」との意見を紹介し、「確かに「古豪」という言葉、他の勝負ごとではあまり聞かない」とコメントしている。
- 12) あるいは、これまでは実際の発言では、「(強豪・伝統校・優勝候補等である)○○の名前に対して気後れる(「委縮する」「びびる」等)」のように言っている、記事化の際により少ない字数でまかなえる「○○に名前負けする」と言い換えていたものを、そうしなくなった、というケースも考えられる。しかしこの点についての立証は難しい。
- 13) 筆者は[3]では「自分の名前に負けるよりも、相手の名前に負ける状況のほうがはるかに多い」と述べたが、これは「スポーツ(する場合と見る場合の両方)も含んだ生活全般において、というつもりであった。スポーツ以外の場面に限れば、「相手の名前に負ける状況のほうがはるかに多い」とは言えないことは表1の数字から明らかである。この点、正確さを欠くところがあった。

#### 参考文献

- 内館牧子 (2012) 「暖簾にひじ鉄 558 カネを積まれても…①」『週刊朝日』117 (51) : pp.46-47.  
朝日新聞出版
- 小野正弘 (1984) 「因果」と「果報」の語史—中立的意味のマイナス化とプラス化『国語学研

- 究』24：pp.24-34. 東北大学文学部「国語学研究」刊行会  
神永暁 (2015) 『悩ましい国語辞典』時事通信社  
工藤浩 (1982) 「叙法副詞の意味と機能—その記述方法をもとめて」『研究報告集』3：pp.45-92.  
国立国語研究所  
見坊豪紀 (1976) 『朝日選書 74 ことばの海をゆく』朝日新聞社  
見坊豪紀 (1983) 『ことばさまざまな出会い』三省堂  
島津暢之 (2008) 「新聞でのスポーツのことばの扱い」『日本語学』27 (9)：pp.52-63. 明治書院  
白石大二 (1966) 『現代語のふるさと—「国語史」のあり方をさぐる』秀英出版  
末田真樹子・花崎佳代子 (2018) 「デジタル版新聞記事文庫—その独自性と活用の傾向」『情報の科学と技術』68 (9)：pp.462-466. 情報科学技術協会  
田野村忠温 (2016) 「Web コーパスの概念と種類、利用価値—語史研究の情報源としてのWeb コーパス」『計量国語学』30 (6)：pp.326-343. 計量国語学会  
新野直哉 (2011) 『現代日本語における進行中の変化の研究—「誤用」「気づかない変化」を中心に』ひつじ書房  
新野直哉 (2013) 「慣用語“気がおけない”の「誤用」について」相澤正夫編『現代日本語の動態研究』pp.46-68. おうふう  
新野直哉 (2016) 「“世間ずれ”の「誤用」について」近代語学会編『近代語研究』19: pp.265-283.  
武蔵野書院  
日本経済新聞社編 (2013) 『謎だらけの日本語』日本経済新聞出版社  
文化庁文化教育部国語課 (2016) 『平成27年度 国語に関する世論調査—コミュニケーションの在り方・言葉遣い』ぎょうせい  
山根智恵監修 (2013) 『研究社 日本語口語表現辞典』研究社

## 付記

本研究は、国立国語研究所の共同研究プロジェクト「通時コーパスの構築と日本語史研究の展開」の研究成果の一部である。また、JSPS 科学研究費 16K02751 の助成を受けている。

## ENGLISH SUMMARY

### On the Misuse of the Japanese Word “namaemake (名前負け)”.

NIINO Naoya

As an example of “misuse” - in modern Japanese, I take up the word “namaemake (名前負け)”. “Correct usage” of this word is to use it in the sense that <one’s substance is inferior to the excellent name of oneself>, but in recent years it has been “misused” in the sense of <being coerced by the name of the opponent>. At first, I will show the first example of the “misuse” of this word occurred in 1932 (7, Showa) and the first indication of such usage was discovered in 1966 (41, Showa). Furthermore, as a result of having investigated newspaper articles from the present, it is clear that the “misuse” is predominant in sports-related articles, and “correct usage” is predominant in all other articles. I show that the “misuse” of this word is a kind of jargon in the world of student sports represented by high school baseball, where <being coerced by the name of the opponent> can easily happen. On the other hand, I show that examples of “misuse” have been decreasing since about 2011, and this depends on a change of the norm consciousness of newspapers.

*Key Words:* “namaemake (名前負け)”, “misuse”, newspaper, Jargon, norm consciousness